

出張最終日。

最終の一本前の新幹線に滑り込み、駅に着いたのは深夜の十二時を過ぎていた。タクシーを拾う元気もなく、スマホで検索すると、駅から徒歩三分のカプセルホテルが一枠だけ空いていた。

（もう、ここでいい。歩ける距離なのも助かる）

深く考える余裕もなく、そのまま予約を入れた。チェックインを済ませて案内されたのは、男女共用の三階、仮眠室Cブロック。

細い廊下の両側にカプセルの入口が並び、それぞれに厚いカーテンが下りている。

（この中で朝まで眠るんだ）

どれかの中に人が眠っているのだろう。靴を脱いで中へ入る。奥行き二メートルほどの箱の中にあるのは、枕と薄い毛布、小さなライト、それから折り畳まれた館内着だった。

(狭いけど、どうせ一晩だし……)

バッグをカプセルの端に押し込み、ぺたんと仰向けになった。

カーテンを閉じると、世界がこの箱だけになる。厚い布の外から、他人の寝息が、左から、右から、かすかに聞こえてくる。

(近い。思っていたより、ずっと人の気配が近い)

深く沈んだ寝息と、まだ浅いそれと、ときどき衣擦れの音。誰かが寝返りを打つたび、壁一枚向こうの気配がすぐ耳元まで迫ってくるようだった。

「……」

少しでも声を出せば、近くの誰かに聞こえる。その静けさに包まれていると、余計なことを考える力まで薄れていった。

（このまま、誰とも話さず朝まで眠りたい）

毛布へ顔を埋め、ゆっくり目を閉じかけたとき。
廊下側から見て右隣のカプセルで、カーテンがさらりと揺れた。

（今の、隣……？）

気にするほどのことじゃない。隣の人が寝返りを打ったのだろう。そう思っていた。

けれど、薄い壁と隣り合った二枚のカーテンを越えて、ぼそりと声が落ちてきた。

「ねえ、お姉さん。眠れない？」

低く静かな、誰かを起こすつもりのないぎりぎりの音量だった。

「……っ」

反射的に息を詰めた。隣の人と話したいわけでも、存在を知られたいわけでもない。

(返事をしなければ、すぐ諦めるよね)

知らない相手に話しかけられただけで、どう返せばいいのか分からなくなる。けれど、その声はもう一度、さっきより少し近くなって言った。

「出張帰り？ バッグにタグついてたから。合ってる？」

(カーテン越しにこちらを見ていた？ それとも、廊下ですれ違ったのを覚えていたの……？)

どちらにしても、答えなければ済む話だ。そう思うのに、無視したことで相手を怒らせるのも怖かった。

「……そうです」

答えてしまっていた。話したかったわけではない。気弱な自分は、たった一言を拒むことさえできなかった。

「おつかれ。こんな時間まで大変じゃん」

その一言が、じわりと胸に染みた。今日一日、誰もそんなことを言ってくれなかった。——正確には、言ってもらう隙すらなかった。

「……ありがとう、ございます」

囁き声で返すと、カーテンの向こうで男が軽く笑った。

「俺も出張帰り。隣同士とか、ちょっと運命っぽくない？」

それきり、声は途絶えた。ようやく会話が終わったのだと思い、毛布を胸元まで引き上げる。

(これで終わった……よね)

けれど、隣のカーテンがかすかに開いた。靴下の足が廊下を一步だけ進み、私のカプセルの前で止まる。

(まさか、こっちに……?)

カーテンの端から、指が一本入ってきた。

「っ……？」

あまりにも静かな侵入に、声が出るより先に体が固まった。男の手が、カーテンをゆっくり折り返す。廊下で身を低くした男が、隙間から顔をのぞかせた。

(若い。しかも、すごく整った顔……)

肩まで届く髪を無造作に後ろで結び、長い前髪を頬の両脇へ垂らしている。片耳には、小さな黒いピ

アス。

切れ長の目は気だるそうに細まり、薄い唇には人懐っこい笑みが浮かんでいた。

(どう見ても、遊び慣れていそう……)

首元のゆるい白いTシャツまで、妙に着慣れて見える。近づかれると、甘い香水にかすかな煙草の匂いが混じった。

(二十代後半くらい……?)

それでも、知らない男には変わらない。

「あ、あの……何か……」

「ね、ちょっと詰めて」

「え……？」

聞き返しているあいだに、男の膝がカプセルへ入ってきた。

「待って、ください……」

「しーっ。みんな寝てるから」

男は私の返事を待たず、体を滑り込ませる。背後でカーテンが閉じられた。布が擦れる小さな音さえ、この狭さではやけに大きく響いた。

（入ってきた。本当に、こっちへ……）

慌てて上体を起こし、奥へ下がったが、背中はずぐ壁へ当たった。肩が触れれば腕も太腿も触れる。頭上には七十センチほどの高さに天井があり、横を抜けて逃げられる余白もない。

（逃げる場所がない）

私のカプセルの中で、知らない男と二人きりになった。毛布越しではなく、もう直接、隣から男の体温が伝わってくる。

「あの、戻ってください」

「だってお姉さん、めちゃくちゃ疲れた顔してたし」

男は軽く笑い、頬へ落ちた長い毛束を耳へかけながら、私の肩へ手を置いた。黒いピアスが、小さなライトを受けて光った。

「だ、大丈夫です。だから——」

「肩、絶対カチカチでしょ」

断る言葉へ重ねるように、親指が首の付け根を押した。肩を引かれ、背中が壁から離れた。体を引こうとすると、反対の手で手首を掴まれる。

「ちょっとだけ。ほら、力抜いて？」

「でも……」

言い終えるより先に、マッサージするような指が動き出した。首の付け根、肩甲骨の内側、背中の僧帽筋。揉まれるたび、こわばっていた筋が一本ずつ

ほどけていくのが分かる。

「……っ」

（気持ちいい。でも、怖い……）

知らない男に手首を掴まれたまま、肩をほぐされている。相反する感覚が混ざり、どうすればいいのか分からない。思わず声が漏れそうになって、あわてて口を噤んだ。

（声を出したら、全部聞こえる）

他人の寝息がすぐそこにある。カーテン一枚越しで、誰かが眠っている。

怖いのに、緊張するほど体の感覚だけが鋭くなっていく。指の圧が、服の上からでも皮膚の奥まで届いてしまう。

「うわ、ここやば。硬すぎ」

男の親指が、首の付け根の凝り固まった一点を押さえた。

「う……ッ」

息が詰まって、押し返すように男の腕を掴む。

「お姉さん、声、我慢できる？」

耳のすぐそばで、ほとんど吐息のような声。

「や、やめて、ください……」

「そんな声出したら、みんな起きちゃうよ♡」

脅すような声ではなかった。だからこそ、逆らって騒ぐこともできない。男の手が下がった。肩から、背中へ。背中から、ウエストへ。

「ちょ、♡」

「しーっ。声、出したらバレるって♡」

からかうような、軽い調子の牽制。外では誰かがかすかに寝返りを打った。助けを呼ぶ勇気も出せず、私は唇を噛んだ。男の手がシャツの裾からするりと入り込んで、素肌に直接触れてくる。

「ひう……ッ♡」

冷たくも温かくもない手のひらが、背中の肌に貼りつく。その感触だけで背筋がざわりとした。手のひらがゆっくりと這い、腰のくびれをなぞって、また背中へ戻っていく。

「出張中ずっと頑張ってたんだ？ そりゃ凝るわ♡」

甘く軽い声なのに、手は少しも遠慮しない。するとシャツを引き上げて、背中から回った指がブラのホックに触れる。

「……っ♡」

「これ、邪魔だから外すね♡」

パチン♡

ホックの外れる音が、カーテンで閉ざされた狭い空間にやけに大きく響いた気がして、私は反射的に周囲へ意識を向ける。

(今の音、聞こえた……?)

寝息と、どこかで誰かが寝返りを打つ気配。それだけで、起き出す者はいない。

「お姉さん、こっち向いて♡」

「む、無理です……♡」

肩を掴まれ、狭いベッドの上で仰向けに返された。男がそのまま覆い被さってくる。

(近い。近すぎる……)

後ろで結んだ長い髪から、細い毛束がさらりと頬へ落ちた。身動きできる余白はなく、至近距離から

体の熱と、甘い香水の匂いが伝わった。

「……っ、く、♡」

引き上げられたシャツの下から、男の手が胸に触れた。ブラをずらされて、直接、大きな手のひらで包まれる。指は丁寧に、逃げ道を塞ぐように動いた。

「……あ♡」

声が漏れて、自分でぞっとした。男が唇の前に指を立てる。

「分かって、ます……ッ♡」

でも次の瞬間、指が頂点を狙うように曲がった。
くに♡

「——ッッ！♡」

息を飲み込み、声だけは抑えた。それでも体は大きく跳ねた。すでに尖りかけていた乳首を、男の指がぐりと押さえた。

「反応、早。可愛い♡」

「……っ、しゃ、べらないで、聞こえたら♡」

「じゃ、お姉さんも声出さないで♡」

ふに♡ ふに♡ ふに♡

「……う、ん……ッ♡」

指先が乳首の輪郭を辿りながら、押して、引いて、転がして。丁寧なのが余計に質が悪い。

（まだ、時間をかけて続けるつもりなんだ……）

男は少しも急いでいなかった。

くに♡ くに♡ くに♡ くにっ♡ ふに♡ くいっ♡
くいっ♡